

〈若い保育者へ〉

## K先生への手紙

伊東 功

お元気ですか。

先日はお手紙をありがとうございます  
た。

すっかり幼児たちと生活することにも  
慣れ、保護者の方々とも親しくなって、  
毎日楽しくやっている姿が目にかびま  
した。早いもので、幼稚園に勤めてから  
もうまる二年たちましたね。

あなたの手紙に、「この頃やっと、幼児  
たちがどんな時に嬉しそうな顔をし、ま  
た、どんな時につまらなそうな顔をする  
かが、わかるようになってきた」とあり

ましたが、私はそれをみてほんとうに嬉  
しく思いました。

あなたの、子どもの顔色や表情からそ  
の気持ちをくみ取ろうとしている日々の  
心がけや、いつも子どもたちが嬉しそ  
うな顔をして、生き生きと活動するよう  
に努力しているようすが伝わってくるよう  
で、とてもすばらしいことだと思いまし  
た。

このことは、幼児教育にたずさわる者  
にとつて最も大切なことで、しかも、最  
も基本的なことだと私は思っています。

どんなに、いわゆるお上手な保育をして  
も、幼児にとつてそれがおもしろいもの  
でなく、翌日の朝、幼稚園へ行くことが  
いやになってしまふようでは、それは、  
保育者として失格です。あなたが、この  
ようなことを十分にふまえて、というよ  
り、あなた自身の気分や性格が、また、  
保育者としての情熱が、この二年間にそ  
ういうものを自然に身につけさせていっ  
たのでしょう。とても立派なことだと思  
います。つまり、あなたは保育者という  
専門職としての適性を十分に持った人だ

と思います。

また、あなたは手紙の中で、子どもが  
いうことをきいてくれないことがある、

とか、ねらいに即した活動をさせようと  
思っても、うまくいかない、とか、日案  
の立て方がむずかしい、とかいってみえ  
ましたが、このように二年間の実践の中  
から保育についての悩みが出てくること  
もまた、とてもよいことなのです。

まる二年間を経たこの時期に、いま一  
度保育者とは何をする人なのかをよく考  
え、勉強の糸口をつかんでいくことは非  
常に大切なことです。ややもすると、保  
育者として幼稚園へ勤めて、最初の一年  
はいろいろのことがよくわからないまま  
無我夢中で過ぎても、その後一、二年た  
つと、つまり二、三年めともなると何だ  
か全部わかったような気になって、つい  
保育者が一人よがりな保育をし、幼児を  
叱ることが多くなったり、また、職員室

で「今年の子どもは——」などというこ  
とばが出たりすることが多くなりがちで  
す。

あなたの手紙にあったあなたの悩みが  
このようなことを背景にしているもので  
ないことを私は信じていますし、あなた  
自身が、保育者として幼児に何をしてあ  
げようかと、一人一人の幼児のかわりら  
しい顔を目に浮かべながら、自分自身に  
問いかけている悩みであることを私はよ  
く知っています。

今日は、そういう美しくやさしい心の  
あなたといっしょに、若い保育者として、  
ここで何を考え、何を反省したらよいか  
ということをお返事方々少し考えてみた  
と思います。

ところで、幼稚園や学校というところ  
は、いったい何をするところなのか、と  
いうことについて考えてみたことがあり  
ますか。

人間形成の基礎を築く場、といっていし  
まえばそれまでですが、具体的に子ども  
たちが何をするところなのでしょうか。

また、保育者や教師は子どもたちに何を  
してあげるところなのでしょう。わた  
したちは、幼稚園で実際に幼児たちとと  
もに毎日生活する保育者として、おりお  
りにこのことをよく考えてみる必要があ  
ると思います。

それは、大まかにいって、二つの面が  
考えられます。

一つは、一般的にだれしもが考えるこ  
と、つまり、「幼児に何かを教え、身につ  
けさせてやる」ということでしょう。そ  
れは、何事も小さい頃からの教育やしつ  
けが大切という考えから、幼児たちに望  
ましい態度・習慣を身につけさせ、ま  
た、知識や技能の芽生えを培っておくこ  
とが、幼児の将来のためにも必要なこと  
であると考える方です。

このことは、幼稚園や学校に対する社会の要請でもあり、幼稚園や学校は、この社会的要請に應えていかなければならないというわけです。世のお母さんたちが、「先生よろしく願います」といつて、自分の子どもをいわゆる「よくできる子」に教育してほしいと願うのも、その姿の表われではないでしょうか。中には、極端な教育ママがいて、「○○幼稚園では、文字や数はもとより、英語まで教えてくれるので、この幼稚園でも文字や数を教えてほしい」とか、「うちも、○○幼稚園に通園させればよかった」などという人がある程です。また、幼稚園の先生方の中にも、会合や研究会のたびに、「幼稚園では、何をどこまで教えたらいいかをはっきりさせてほしい」と発言される先生がみえたりすることがあります。あなたの幼稚園のお父さんやお母さんはいかがですか。

ともあれ、このように極端な考え方の人はともかくとして、幼稚園や学校が正しい意味で社会的要請に應えていくということは、大切なことだと思います。

しかし、ここでよく考えてみますと、これまでの日本の教育が、明治以来、外国に追いつき追いつ越せという立場から、子どもの側からいうと内的な要求より外的な要求、つまり、社会的要請に應えるために力を入れ、「何かを身につけさせる」ということに専念しすぎたため、教育としての大切なもう一つの面をおろそかにしていたということもいえるのではないのでしょうか。

即ち、そのもう一つの面というのは、幼稚園や学校は、特に幼稚園は、人間としての幼児の内的要求に應えてやることろだということです。つまり、幼稚園は、幼児たちが、保育者とかかわりの中で人間としてのしたいことを十分に、十

分な満足感を持つことにより、「人間らしい人間」として育っていくところだということでは。

ある時は家庭や地域でしていることをつづきを、ある時は家庭や地域ではできないことを、しかも、同年齢の子どもたちがたくさんいる、いわゆる「子ども社会」の中で、また、保育者という大人とかかわりの中で、思う存分に活動させてやるところが幼稚園なのです。園という字は、そういう意味をもったところのことをいうのだと私は思うのです。

考えようによっては、このようにしたいことを十分にさせてやるということを通して、先に記した望ましい知識や技能、態度、習慣を身につけさせていくというように、このことを一つの方法論として考える人もあるうかと思いますが、それはそれでけっこうですけど、私はそうは思っていないのです。つまり、幼児に十

分な自己実現の満足感を持たせることが教育であると思うのです。

あなたが言ってみえるように、幼児は、興味や欲求のないことには見向きもしませんが、興味や欲求のあることには、熱中して、いっしょうけんめいに、本気で取り組みます。そして、その取り組みの中で幼児は自分の持っているものすべてを出し切って活動し、成長していきます。幼児は、自己実現の中でこそ本当の発達をしていくのだと思います。

このように、幼児に、自分を出し切って本気で取り組む活動をさせてあげることが指導であり、人間としての発達を助け見守ってあげることが教育であると私は思っています。あなたが、幼児が熱中して何かに取り組んでいる時の目の輝きは忘れることができない、幼児があんなに大きく尊く見えたとはいない」と手紙に書いていましたが、それを読んで私は

ほんとうに嬉しくなりました。そういうあなたがとても美しく感じられました。あなたは立派な保育者として成長してみえるのだなあ、つくづく思いました。

このことこそ、つまり、子どもの生き生きとした目の輝きを得るように保育を展開することこそ、保育の核心ではないでしょうか。子どもが先生のいうことを聞いてくれるということも、ねらいに即した活動をもたせるということも、またよい日案を立てるということも、すべてここから出発して、ここに帰らなければならぬのだと思います。

先日、私がある幼稚園へ訪問した時、若い先生から質問を受けました。

「いろいろと話は聞くのですが、落ちこぼれなくみんなの幼児に同じ経験をさせるため、やはり一斉保育がよいと思うの

ですかがでしようか」という質問でした。

それで私は、その若い先生といっしょに、次のようなことを話し合いました。

ご質問のような立場に立つとして、実際には、朝からどのような保育が展開されていくのでしょうか。朝八時四十分頃に何らかの形で合図をし、一斉の保育に入るとして、それから約四時間、全体の活動が四、五歳の幼児に可能でしょうか。まず不可能でしょう。それでかりに三十分ないし四十分ぐらいをひとくぎりとして、例えば、「さあ、みなさん△△を作りますしょう。紙をとりに来てください。このように持って、このように切って、このようにのりをつけて……」というようにして、みんなの幼児が落ちこぼれなくできるでしょうか。同年齢とはいっても発達差の大きい幼児に、保育者の「みなさん」ということばが、ほんとうに一人

一人の幼児に理解されるでしょうか。よく先生方から、「どうしても勝手なことをする幼児がいて困ります。しつけはどのようにしたらよいでしょうか」ということを聞きますが、こういうことは、ほんとうに「しつけ」ということで解決されることでしょうか。そして、そのことよりも先に考えなければならぬことは、どうしたら保育者がほんとうに一人一人の幼児に行きとどいた指導をしてあげることができなのか、ということではないでしょうか。

最近、小・中学校でさえも、これまでの画一的な一斉指導を反省して、一人一人の子どもを大切にすることか、小集団活動を活発にすることか、子どもの自由な活動を多く取り入れることかを研究テーマにしている学校が多いことを考え合わせると、質問のように「やはり一斉保育で……」ということとは基本的に

に少し問題があるのではないのでしょうか。

幼児にとつて、「遊び」はたいへん大切なものであるということには、だれしも異論のないところです。そのため、時間と場所と環境を十分に保障してあげなければなりません。ただ、「遊びなさい」といつて放っておいてはいけません。

保育者は、常に幼児の要求を受けとめて、それにみ合った環境を設定し、幼児が本気になって真剣に遊びに取り組むようにするのです。よく、幼児の発達に即した指導が大切であるといわれますが、「幼児の要求」こそ、幼児の発達の具体的な姿なのです。ですから、指導に当たっては、例えば、幼児に与える紙の大きさや厚さにも保育者は十分な神経を使い、一人一人の幼児の気持ちや要求を受けとめて与えるようにする必要があるわけですから。

一人一人の幼児は、

(1) 保育者とふれあいたいという要求をもっています。

(2) 「本気でする活動」に必要な時間と場所を要求しています。

(3) 生活のリズムにくり返しと変化を要求しています。

(4) 保育者を媒介として、友だちと仲よく遊びたいという要求もっています。

(5) 学級全体でする活動では、緊張と解放のリズムの流れを要求しています。

このことをふまえて、保育者は、担任する幼児一人一人の具体的な要求の姿を十分つかみとり、それに応えてあげるようにしてほしいものです。

要するに、一斉に「さあ、みなさん……」といつて、例えばゲームなどのみんなでした方が楽しい活動以外の活動をするということは、表面上は「おちこぼれ」がないように見えても、実際には多

くの疑問が残るのです。むしろ、ほんとうの「おちこぼれ」は、そういう保育の中から生まれてくるような気さえするところがあります。

とまあ、およそこのようなお話し合いをしました。あなたのご意見もまた聞かせてください。たのしみになっています。

「民謡を歌う人は、また、聞く人は、その民謡の生まれた国や地方の景色が、さらには、そこに住む人の生活がみえてこなければいけない」といわれます。音楽とはそういうものですね。わたしたち保育者も同じだと思います。幼児が遊んでいる姿から、その幼児の気持ちや、保育者に対する要求がみえてこなければいけません。つまり、幼児の表面的な行為だけでなく、幼児の内面がみえてこなければいけないのだと思います。幼児の内面

が少しでもみえてきた時、そこに、はじめ保育内容が生まれ、保育者が幼児に何をしてあげたらよいかということが導き出されてくるのです。

あなたもよく知っているM先生は、幼児が降園した後、保育室の掃除をする時、できるだけゆっくりと時間をかけて掃除をすることになっているのだそうです。それは、例えば、床に落ちている色紙の切れ端や、何かを切りぬいた後の紙切れを、さっさと掃いてしまわないで、それをじっと手にとって見るようにしたいためだそうです。そして、そこで遊んでいた幼児たちの顔や目の輝きが頭に浮かんできた時、それをノートに貼っておくのだともいつてみました。私は、M先生がすばらしい保育をなさるわけがわかるような気がしました。

たいへん長い手紙になってしまいました

だが、終わりに、三重県幼稚園カリキュラム委員会では、保育者の心構えとして次のことを話し合っていますのでそれを記しておきます。参考にしてください。

- (1) 幼児とともに遊ぶこと。
  - (2) 幼児の感情を受けとめ、幼児の内面の世界へ入ること。
  - (3) 幼児から学びとり、幼児とともに成長していくこと。
  - (4) 幼児の活動の意味や、発達がみえてくること。
  - (5) 常に保育に疑問を持ち、反省すること。
  - (6) 広い視野と、ユーモアを持つこと。
- またおりおりにお手紙をください。お互いに少しでもよい保育ができるように話し合っていきたいと思います。
- くれぐれもからだに気をつけて、毎日晴れやかな気分ががんばってください。
- さようなら。
- (三重県教育委員会)